

鹽

虎

三篇
十



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

A vertical ruler or scale strip positioned on the right side of the image, showing measurements from 5 to 50 in increments of 1, with additional markings for 30, 40, and 50.

+



102

内閣文庫
御内政院の居所を記す院
あらわしの日記
ゆえに本居宣長の書
トシテ之とあがつての身をも
の羅院是モナニ
道子外事を考へる事多
○原稿本は本居宣長の手稿
○



卷 40
508



吉田文庫藏本

吉田文庫藏本
或曰後院廟帝皇后れ成の院後東福院の事
ありハ行幸也曰明紀と稱すに帝後成一門近幸成
治すて後光嚴院と立て御門とせ一ハ后經と
下ノニ又つセ禮院の院の事と稱すれ一帝還幸
の後院号と立て中主後一崩後又後東福院と
追号一あらかよ西乃名号あり
○原秀康ち平虎胤父ハ下総小豆原郡布農東福也
ち友胤小豆井行所合戰ひ以甲判一以御國後虎又仕
一_ト後院号と甲判一は一_ト其名あく小豆虎譜の字
と抜け虎胤と稱す後判の小字也仕

○池田城井、よりと右列作の本の處へ來りて右田遠
山と飛来飛鳥の邊倉上野在原にありて右田遠山の邊よ
小栗少陰氏の屬を永正七年正月右田遠赤資高
小栗に於て房列の里元義以よはる里見小栗会
難の時小栗東臣遠山丹波ち富永三左衛門等観
ト右村佐枝橋井久松間又力戰至る乃處(松
木澤西太勝山)を弟ち秋元將監か後たる乞長萬七
年冬居候もそく外健賀多紫敷十人討死
海津民々里見乃西へひりて後山田(属)一
る西行は信行と名のす

○三別志福寺村志福寺ハ守尾方連乃三男志福と云
人仁木乃久一紀せうれ一時立ツ取学六葉院佛満
院高麗見山ね無きと云慶和ノ御座之佛學院
寺ハ清原云の御跡恭宗尼云喜提道場之

○鷹岡村久樹寺(淨ちふと号)ニハ成道山と
ね多村や松山高月院ハ松平氏代の手

松平七平左助翁 柳平 桐楓平(シキブ) 紫平(シモブ)
小市平 羊平 京羅平(キヨブ)

○上野村志福寺ハ松平因幡四條室の手

○岩津村伝光院寺ハ源勤山と号す石入山也。ゆく寺ハ法性山と
号す。勅人院歟ハ寛正二年十月般月逝き百一云み斗ち
以あり。

○二村山法無寺ハナミ

○ゆうま村よ是の字ちこりも是曹洞流下の古刹也。
降山教海院の主じ人じん石川達康云ば寺こそ是の字を
差えよめい。右旨の下の人じんと相せさせひり
テレハ初はじよりもすゞ御開基と見えたりと名
酒井一堂院善光跡なり。

○本郷村光仲寺ハシヒト。序考云御別後松平左東庵
忠政の寺也。

○先代村勝蓮寺ハシル寺。被河と園東よりあまの院に入仰
の附あはれく少休止ありと云。

○大樹寺文院及至院ハ道軒云けぬれ院香火所也。

○大原称名ハタケ、慈人ハシヒト傳惠云山居庵布成ハセちとせトセ。

○東城村富生寺ハ松平高家多ハサウエニハ當ハサウエ也。久々に
凡三別幸院古跡ハシヒト多ハサウエ今ハ當ハサウエ也。と云。而
たら幸院乃ハシヒトあはれ。前記も是三別幸院布成ハセちとせ
長ハサウエ七黨ハサウエと云ふあり。而得工山由村もあらゆ此
村御堂ハシヒト金屋乃ハシヒト金玉うち雲霞の賤ハサウエ風ハサウエ也
阿海淀ハシヒト也。而墨ハサウエ也。と云。

○伊賀八幡社ハシヒト有あり六面の神ハ初松平郷より

親氏公奥引けを廢の附塙窟六石御神。初め入井
家門再興り。後に松年院寺破より石御神と祀
り。大神君の御附松年院は也。又近在より社と建
アモトヤマ創始於成化の御土てはまゝも家
あり社屋百二十云七斗五石馬乃れ。青蓮院門
主丸御筆。九月吉日。多謝的至。御前より。説
文房塚とす。あり故ありぬ下。

○一文破麻原神社ハ文武帝代附草麻破宣勅と奉て
創建。次祖宮代と。麻原破氏之多。九月吉日

十あまりのからうどのふ原ハその少坂井村なり
きよよ。また。次の後。ろつ村八剣社と云。

○ト和爾村。尾犬既神。口ナホのまことハ本多大久保中野の三氏附セ

五和爾村。首太岐神。祠あり。傳云。始國來事。蘇せ
リ附通也。乃ち蛇山也。と考。江戸より。里山也。此
間の大波蛇を跡。あふ。も。り。した。和爾氏。因と送
こと。あ。や。ま。と。あ。と。ひ。な。と。切。教。し。り。後。よ。そ。事
と。知。り。临。て。尾。山。と。於。一。所。に。祠。を。立。て。祀。り。一
祠。と。ふ。大。寺。既。神。起。と。一。取。り。り。向。く。而。く。に。ふ
我。多。下。古。后。村。又。寺。既。神。起。と。亦。同。し。ま。ほ。り。

○三利寺。院十二室

松平右京 松平左京 松平義宣 松平信重
松平忠信 松平義宣 松平義重 松平基重

小野清三郎 近藤多助 大庭義弘 山田吉之助

沙地一家 山下源助 植原八郎

○若尾村、政あり然とふ者に觸り一ことや
○柳の村より柳松とすがあつ年々柳乃木く生むる
化すよはあつあつ

○中山吉岩戸材小三蓋ねく少本至天井院 天井院幕
の紋とせしへばあと云ひてう

○猪内村万巻船を支え年東部より正月十日には
却定跡にてる事と勤め令する所以爲く清
美御舟にて勤め十日後福りしと云
○千丸三河ハ我を室ヶ平費の小なるをり

○寺を創り主に寺主なり其よが家號遠祖遙利
○寺うち山を引き移りにて松平へ主にせしと
主を居の地名にりかねばゆき方ハ家國船に
由て是萬より二星斗人七名の因岩戸材ハ天野村
○今ち主貞の五代人正彦寺のぬま 岩戸山正彦寺天野
院御草派 矢吹強右衛門正家前建國山寺正上人正家
ト天乃君三蓋に 茂丸社を守ま候なり
○當有憂國之心不當有憂國之語ヒム古語を誦て
君よほふまづも言責なき身として玉政乃
是遂ヒソクを喫多らのミナヘ忠臣の意小をけり
○木乃子と佐助とすれどあのつゝと見らんとぞす

りの是ハ多の疏の通法よりもかよして心境より生モ
轉へ去ル事と/or/されハ孟母の三近居を承とつ
一車の深やまととすアリノ府和場名門に入
れま人とのに立ちとるとひに斗篠の隙を云
ふて計謀をもと庸人と交梧して独を擇を抗
ましと大丈えの漢よあすばれしとす

○八情山より高良明神二所ありとらに武内宿禰
ト云ハ北り二十二社迄肩書石碑水別有澄清上
高良ハ武内下リ高良玉垂セ云師時記曰江師
高良大明神者武内也非也高良者藤大臣連保
也神号曰高良玉垂命以子滿兩顆令奉行之故奉

玉垂云

○三上刑部少輔乍属干義治令隱謀與敵欲討
之婢逆令承知其意趣相謀于舟田十郎安經去
月十三日於安經之營令鳥首三上兄弟之條委細
令達畢誠無二之忠義其感殊多可論賞其
功勿論也先附告達之脚力感賞之狀如^伏件

奥国元年十一月三日

義助判

天野備中守

山内二郎入道

間嶋四郎三郎

右古感心事家にあも傳中ち名を経改

肥後國住人野本次昂宗光宮上彦六頬次偽而屬于
義治之後令隱謀通路之肯密知之今曉一人死被
討取之條神妙之至誠其感不斜候追而可賞其
功者也

貞國元年十一月五日

義助判

大次彦五郎

右古惑伏魔下久延氏義助

極ノ足後村之渡昂住の元年以財刑部ノ義助
を野より國大僧神明鏡櫻方紀等南方の事と
洋々せまれハ所考乎ト左手記も承古東二十二卷
闇かかよ半江考乎にはな一右ニ通體書同筆蓋
ト是義助自跡筆也

○延元三年丙寅北朝曆庚
元年 四七月一日左近源中將義貞

死弟是足母アマノミノ節に死一ゆ立弘是記序書ハ刑部
七月十日と云ふ歟之刑部
ノ義助敗軍乃士ど集り義弟死後之海アシノ八月
十六日後程破天皇崩モ是役ニヨウテ後村之渡義
助ノ倫育と成下されて曰遺勅異他之上義助ノ例
易アシ官軍恩賞以下事宜相計トニセ宣下ト至リ故
詔文トシのち當と挂合せられしとある也

義助延元乙年九月義弟死アシ逃れ隠別根尾城アシ
極ノ通す尾張アシ初多那羽豆アシ深又次て海と應

て吾輩小西の帝も熟考成廢一級を以て從
已位下に叙せり十月三日後村と院昂佐鳥國元
年と号し二年正月に勅としけはさ九川の苦處
使となり徳川慶よ居れり五月有病て卒す。

朝氏 新田二郎太郎

贈從二位鎮府

義貞 左中將

義頭 赤後守

義助 刑部卿

義真 左少將

義宗 左少將

將軍 義重六
世新田太郎基氏

義助

刑部卿

義真

左少將

義治 左衛門佐 義陸 相模守

負氏 橋瀬新六郎
由良祖也

此外義顯之裔越前堀江等

○豈並四天王像於延岡村者閻尼山羅漢寺石像の五百羅
浮ハ逆流建順と云傳造れどもやがて其事大變也
○豈後圓覺之跡あ錦布山ハ溫陽涌出の山にして常
に烟立ち故里に名あらば信の古號よ

忠のああ錦布山嶽翁士小似て煙もやまとあれうう

右延喜神名主所哉火男大賣神社二座とひ是なら

庵へはよの幕に多く勢湯涌もて源と海をあらず
あるく河を乞食と謂そもろ概に大氣と熱
セーも又内襟と割り疏草と臺らんとぞ民
ありとせよ百合若臣別名の祠ありと有
りと有り圓山郷山二十八削とて首仁尊菩薩と不
信開基セリ寺多リ今ハ荒廢一けふもゆうと如
ま中に峨嶺山文珠仙ちハ役小角中興セリ附白大内
塔ありて文珠と感せセリ故寺とく小角の像
前すみ形とあくび寺及至山山西寺名岩屋
山天教寺ありと室三五石の下を御靈地といふ
毎年四月七日の夜鬼會あり此鬼魂是吳押鬼
ひくとの役とハ寺傍にありて遊の侍らと云ふ

○肥前國福浦郡の海中平戸より二十里にうき波よ神
波と号を因るよ神可祐神社と神名也よあるとや
平戸南乃端よ吉波の神社すと島を又平戸移れ
内作法七神大権現とよ神あり正丸二社とも同名
トウヤ神波をハ吉波とセキトをお歎是一部の神なると
田波ハ名神大社七神ハ福宗新嘉代の神也

○筑前玉觀世尊寺ハ今微にはりり翁翁湯の主敷
多居に敵國際仕と申額あり筑後玉殊御淨云系
開基禪阿の役せし善導寺今あしく不仕事と云
ゆ傳承十二院詔び三うと云ふ

たゞあそべる荒事（やまと）をもん傍（わき）まへ西風よ吹く中
にて訊り仰ぐ。一五より二三とてきり行ふも。也
くわづきまゐれほんに見一五すけり。是
○。中一二をあくに筆。一。行は傍乃云也。後一。ありて
是まくまきうづうたる多くて。行はに清人の私
よりそしれ。私とのをと見一。天妃と
あを。桃檜と無ち。

四海昇平圓日月九列樂業具乾坤

とふ一聯の句と見仰ぐ。一。もます。が文書のまえ
ある。と。侍もあれ等の私者をと。文字を
ぬき多き。あと。あと。下さる。一。又曰。湯
乃ゆくと。異れどく。眉毛を生。一。常と。年老する。女
顔か。一。卒テル。圓。一。面。一。血。一。年。圓。絶。守。一
リ。令して。頬肉の女眉と。利。行。も。と。め。つ。り。ゆ
る。やうに。つ。よ。一。卒。ぬ。ね。復。も。思。寄。り。薄。の。年。を
どうぞ。留。と。舊。慣。す。若。モ。や。繫。と。と。げ。モ
と。ア。せ。れ。み。ハ。是。と。行。田。食。地。保。と。と。似。事
即く。あ。と。う。な。と。一。今。人。も。ち。遠。と。と。と。と。と。と。
の。す。が。り。く。行。く。や。き。い。つ。く。と。眉。を。身。を。行。に。あ。
あ。が。れ。よ。い。ま。か。ぬ。す。行。か。や。但。美。邦。の人。か。り
が。れ。八。眉。を。生。一。行。く。や。か。一。と。と。と。と。と。

○。肥。足。高。流。宿。の。社。麻。一。年。五。月。己。日。神。樂。三。

墓をさへありあり室陽の日還度ありしも帝升り踊
の淫樂と淫清人及紅夷等に三段紅夷ハアモチヤ九
山鬼遊女數十人最初に酒にて優游と稱すと云
或ノ同車也大八景小八景の集の字根草ハ曜乃字に
して九曜の紋あるか名号すと識者ソトヨリモ
至シニセキ力解と稱せすして八曜もアハ行也
お鷹子に佛眼曼荼羅ハセツクシム目見どか
ハ眼とす蓋モリルアリテラ後モアリは言セテ
○冠の老撫ミタ名前と何のあらずすまの事解也
云是モ覆拂の事久々再びにすアシテ古ち也る
半ら無事も事とありテ西より來るをめおほりと云
況や向ヒ莫も支老撫トハヒトモ吉繁聲シマシも
不若シモ板上足をゆくを極め、覆拂の意と何も
ヘリれと續古ナレ神祇の祭祓事成義也
○楊花老のモヤトヤトヤト神のモヤトニオモモタタ
ハシハ楊花モヤトヤト老モヤモモモモタタタ
タケハ老かく一丸転拂と云ひ物故テ更ヨリモ
ねリ所々有りと云ふ事也
○中將歌海歌歌よハ古二云代の寺院多カシ一中將
歌奥田村安養ち十八坊今荒中、庄村瑞泉寺十二
坊七支村も宿モセテ益高村東原寺二十一坊今加須院
城外矢合村玉立寺今後て四法善寺付玉立尼寺
玉立寺大塙村性海ち多野村萬德ち月弓村長孝
と云ふ

今六角せん
後世移今代一ノ村地並み多々海船取扱事用度今を
十一坊天台一院ハ新屋村法性寺今二院蜂須賀村草薙寺
乃外國教首の國帳にててる安國寺方引ちおぐも
クナリす是等顯密乃名匠なり一時ありて苦惱之
今あく病アカシヤ地後世靈山が林まほのまも
向うすよそ人の世あるをか古事記に
○まのこう或くのみに

花多代も多きばかり正ねの多きとくも身へ意とく
さうレキハ深き多きとくなけれどもとよく少モ
れ、正下の向車マダラにひやうとやまの車カミ馬カミ走多
起アガム小の外アヘン車カミありあらゆるを走れ
あらじえアラジエそと走る疾人アヒル又北野狼脅アヒルのまに
馬車カミ走り地アヒルである其のまにあらぎやと船の掌
手アヒル御アヒルのまアヒルとすアヒルあられ得アヒル詩アヒルもふとアヒル等アヒル
傳老アヒルの詩アヒル詩人アヒル乃活アヒル新氏アヒルの詩アヒル庸俗アヒル其詩
ありあらじえアヒルとすアヒルけいアヒルすアヒルすアヒルけいアヒルし
○象鼻流傳アヒル因三面六臂大黒天神アヒル軍隊アヒルとすアヒル。大日經
精氣アヒルと二臂アヒルの者アヒル貝殻發アヒル初アヒルとすアヒルモニ大日經教
降アヒル本アヒルと云アヒル故アヒル此アヒルの丈アヒル傳アヒルと云アヒル事アヒルとある事アヒルありとアヒルも

令輪アヒル耳アヒル)

○當口曠呵哩帝母アヒルとすアヒル二鬼アヒル曠呵アヒル乾達婆アヒルり
呵哩アヒルハ鬼アヒル母アヒル事アヒルにて如意輪觀音アヒル跡傳及アヒルと云
故アヒル此アヒルの丈アヒル傳アヒルと云アヒル事アヒルとある事アヒルありとアヒルも

○日蓮と大蓮明院と号を日には村延徳寺院鬼簿が
く記せり而にへん乃の作すあらびを既開基六日傳ヒ
シ傍無事ニ年八月二日に死モトツア

○或問日蓮堂ノ門符三十番神焉齋神呪ヒクア齋
トは天台家山王の中之神とあるてあると至同可也是
ノ葉玉神又ニ笄小多聞神及毘盧迦神と加ヘテ有
神心乃ヒトカタ多神形よ御ノもまも徳深く又問甚云
圓照明神の像と云ふあり何神を至同圓の左ニ末
弟の像ハ立地四臂と云フ是尼社^{天豐寺社}たゞ六丹生四臂下此
右ハ卷掌手の左ハ三面比の神像也 云セの事ナリヨ
比の神社ハや前小迦す也向ひ右放より仰人附にて天
風あり^{俗云拂子}階下黑白の二大ありこれ拂拂四臂と云
空海^空入にて坐山中^中神^中と云れ神門の像多く、
空海^中御^中大螺^中を胸^中お一玉^中處^中人^中坐^中そ
風風^中る^中多^中也

○時ハ卯月のうち^中大樹^中山^中免^中白^中徳守
東照大權現の御社の内造物の地^中に^中か^中て人舞
を^中せ^中と^中の^中^中は^中と^中を^中の^中と^中を^中白^中舞^中と^中
あり^中あり^中も^中れ^中ち^中と^中の^中と^中を^中と^中白^中舞^中と^中
け^中又^中天^中花^中舞^中一^中あ^中か^中一^中あ^中よ^中ま^中い^中ト^中わ^中り^中ま^中こ
と^中か^中代^中思^中う^中も^中の^中も^中神^中の^中御^中神^中と^中
若^中か^中を^中ゆ^中り^中ト^中近^中奉^中御^中代^中白^中鶴^中の^中御^中神^中

ちつともあくせのゆに云のしるすがれはげの
きをめよし及へばまもじく初生るけ代りか

權大納言源宗光彦

まほてう跡一木神の山とよとやはあて野むちま
えよまよとみを五所(友説)の聖なる御の度

寛永十一年丁酉入

○三月三日ハ、とおふく、櫻車と藤、一舟、風船とて四つ
河上に船とうりめ曲水の逍遙とす。詔差と奉じ
玉もむらの湖干にハ、波色へりて、島宮を有す
凡詔別海を今御子とて持ひけり。春を詠すも三月
三日湖をとあれハ、多那也か、同ト、春をや三日にか
うに季玉上旬之湖沙代半侍もふと常に、是より秋
モ、第後ハ、湖をよ海侍る古人よと櫻日少て、海色へり
まけ日のみ湖キルやすに是之かくも云ひたる
戊子立春の日和未喫日にてて、首川東の名残とか
そそれハ、櫻同海原つ生侍り。其後去志去りて
東風力りくと、南風と北風と、風はその候
ふもおり一暮寒休休迫ニ、日度三二と通して、神宮
と寺内御事に民の事と御事ふとて、呪めの集り
ぬ侍と云ふ、候。そと、奥院がうち成化りりすも
の二三人やと、はる成者じこうに、あらや豪
とんとんと、はる成者じこうに、起り侍て、一星居す

序下から事を一々まとめて記す事の多い
多かば御殿を御みはよ矯りてあくを生じる
人形まで立てぬ侍ら御の御氏相傳とあれ
久くもあればあふれども正に必ず争うと云く
初也其御をせん事より向敵をえ系役の紙人
形づけたり身の代乃金剛はくととの役を用ひ
竹と豆同古の離と水の流り竹と豆のやうに
しよびれと信頼とるく官女既像と象と云ふと
考案は是ち幸の神あり「天主降農家成
達鬼也れあり」、技巣園署記をとて竹と豆幸
と豆よりあかり未證徧可幸あくと豆

多れらむれきに離あひの調子などと見えりに
とねりけりはく端は流れ根が成るまわ
るとき也

○序下性高院・甲州・西村・吉田・大雄山正寛寺と
号せし・清參上人・忠吉卿と遭遇せし・度長年中
甲州・清次・福丸・郷の御母・宝臺院・一品大夫夫人
乃香火の場小なり・一百石地と寄於・少
卿薨後・院号改称・以て院と号せ・度
五十五年・延慶の付今の地より移
○高岳院・ハシト・甲州・新麻木・吉田・持名山教寺
と号す・否定和為・麻木・煙えひ乃て始一千年

の善哉道場とはしてち坐院と号す年多観音
あらわらうどくや

○至日坐於山因庄大永寺村古ハ川村の代大永祐ちハ古事記
曰ひなり川村の產是因住習す時事大永七年正
建して柏悦道根和尙と中尊寺一社とす和尙
丹波守はまどり菩薩自益自賀の像として有る
うち神の繪を

○山因庄本ケ陽長妙寺岡山勅謚大圓國師ハ西和光寺
十月十日寂矣

○源賴義の裔貞季と云ふ筑後玉作ハシタマ村主作
甲冑と仰て是筑紫甲冑所併之氏の先祖と云々

或說大原暴伐カブチラシナといふ者神功皇后乃江代始く甲
冑と仰て是暴伐、武因ハシタマ一説又暴伐のよ
源ち和國岩井村主佐東園と云ふ甲冑成製作
源義家と號す是ち和岩井の祖といひ又一説小
塩冷泉院門主利村貞良地主春日の源氏と云
者甲冑成製作と云ひ吉備・開化・天皇・後醍醐天皇
六世乃源繁同と云ふ者治田連姓と號すと云々
是今丸春田乃名祖なりに號す是も其事と云
也

○座下・東照宮神幸式時音樂城奏ヒラタマ・寔永セ
紀修と號す者加藤の伶人城門和琴町主

樂と奏せりとや安永八年 大樹院院令と號す
十三人と號すの因爲れ修炮弓の内達處も
事慶安三年四月新比奈を爲め居を六度也
○候一名馬留倦遊源より我ふるとソミニ
水道すや

○聖歎七種年あり被除樂と云九功年と慶若樂
トスハ度の樂あり

○喜樂に大食洞あり群書類要等に喜樂ハ大石洞
石乃音堂職功合あり石食音同ト喜樂也洞之
伶倫象ノイシツ洞とも

○日本宿服語高長ト角子はかのゆりとす

曰隋煬帝以毛褐十二被石仙祐と古書に云也
○毘那夜伽天ハ荒神の事にて毘夜ハ白蛇と称
或ハ賊放祐と譯すと教祐之無狀天と名副の
支りふす中比うる毎天の像と仰り頭小白蛇成
體りしきて或とテ望祐と稱モ毎天の以ハ圓せられ
して蛇上あくハ又青面金剛の如様と仰るも其
の形意なりかハ鶻體と稱りしも像なりと云ひ
玉もまようて様の如と戴き三面六臂あり且そと
りたりするや

○中比耶別名漫角村若焉三所にして十二坊あり也
是とお義ちと云や地を河原泥の像と爲て仰

長壽寺

宿向土人開祖と以テ天王の社を北可ト

て一坊乃ク足成藤坊とシ後或ミ天王坊と名
又一院と常極坊とシ天王社ハ延喜十一年 辛三月

十六日依勅令勸請と云く亨孫多申徵因佐秀

今川たる升と攻マレ一時甚大の力を有し神社院室

守煙丸彦の充照よりの力子充養上人

中村對馬ち
元源信

充吉ウ師ノ充輪モ夏の一院法勸請と互與して
位すは僧龜尾山安養寺院縁記と仰る法充養輪
因よ併勅光と近シて主院と南坊とシ南坊也

乃今ハ西の坊もす

名古屋近府の付差々と茅葺作の也よりつを
安養寺ハ主院の因よ近シ天王坊今に和ちみ

院家にて院室改め主院と稱す

○龜尾山安養寺弥勒院再興縁記序曰當寺蓬
萊興之地景松風帆々彈琴寢上乘之道場桂月
團三堂軒威神和光垂鎮座

私云龜尾山ハ左本州愛智郡那古野庄若宮三所鎮

本座地也

金龜圓然愛靈尾龜尾山号由此者也

梅龜尾古訓奈羅於今或称奈奈於者其轉語

私同聲田神宮寺龜頭山カナガキナリ今木津山那古野庄當北芳

故称龜尾

開基宥円僧都受生四國住居乎尾張東海武州儀
海法印受明灌頂傳法灌頂秘密印金悉皆傳授人
宥圓ハ後醍醐天皇時人中嶋郡大須庄真福寺能信上人
全依宥圓而受受明灌頂大炳流是也

本尊弥陀三像號田八叔御作即座下敷三叔云

此像至近世安置天王社本地堂宥濟法印左位之時授志
氏為知多郡大高村長壽禪寺本尊是古若宮本地佛而
英安養寺十二坊本院本尊也

私梅是神名式所謂孫芳御子マツワカミコ神社欲旧記無八幡号而
次錄牛頭天王社上

弘勤院堯照天正年中所筆不動維摩供次第等若

宮并天王云

亨祿五年壬辰二月十一日軍兵入林皆悉燒亡云

若宮三所牛頭天王等神社及寺院十四坊燒

天文七年再與八年八月廿一日入佛開眼供養良是弘勤院再
建而若宮亦重建也

龜書曰天文八年八月廿一日權大僧都堯瑜堯瑜ハ堯照
上人附弟也

右ハ秀王坊並古廟記の文と略す。誠公國史
御撰の附世廟記を出焉ハ秀王乃祖天王小
上人也。或云成云かく一之傳也。持もて傳向祐
寺ハ明天皇の勅願所にて代々左翁寺下童

僧乃中主坐於圓白多にむかへ龜形の丘あり龜
の坂南よりとつて名不^{角板}あれハ神多^{アシ}成龜山
因福^トと龜井^ハ寺と名正覺達^{タツ}多^{アシ}足^ヒと称
テ一名古^ハ名^{アシ}ハ^{アシ}圓の正小大^シ龜尾山の稱も^{アシ}今
の龜尾天^{アシ}神^ト安^{アシ}居^{アシ}十^{アシ}二^{アシ}方^トを守
侍^ル焉^{アシ}寺^ハ龜尾十二方^トの^{アシ}号^{アシ}ナリ

○郭内牛頭天王社延喜十一年三月十六日初建
ノトナガナヒキ^トを^{アシ}日^トモ^{アシ}ニ^{アシ}故云^{アシ}毎^{アシ}奥^{アシ}の^{アシ}附梁
牌^{ミハ}素盞烏尊神社と遊^{ハシメテ}牛頭天王^ハ
盡^シ乎^{アシ}此^{アシ}事^ト云^{ハシ}傳^{ハシメテ}後風^{アシ}迄^シ以^{ハシメテ}來^{アシ}此^{アシ}事^ト
それより^{アシ}せ^{アシ}ウ^{アシ}但^{アシ}摩^{アシ}田^{アシ}有^{アシ}ウ^{アシ}社^{アシ}の^{アシ}小^{アシ}祠^{アシ}の^{アシ}方

一者從一位素盞烏名神^ト也^{アシ}此六社の^{アシ}
水上姫子名神^ト也^{アシ}高村の水上^{アシ}社^{アシ}也^{アシ}又日
長名神^ト也^{アシ}此^{アシ}龜^{アシ}石^{アシ}也^{アシ}高村^{アシ}也^{アシ}社^{アシ}也^{アシ}又六
社とい^{アシ}一社^ハ摩^{アシ}田^{アシ}也^{アシ}此^{アシ}青^{アシ}食^{アシ}の^{アシ}神^社
是之極^{アシ}て^{アシ}減^シり^{アシ}也^{アシ}此^{アシ}遙^{アシ}詳^{アシ}不^{アシ}可^{アシ}得^{アシ}也^{アシ}、
素盞烏^{アシ}也^{アシ}神^社^ハ今^{アシ}郭内^{アシ}天^{アシ}主^{アシ}社^{アシ}也^{アシ}故云^{アシ}古
富^{アシ}よ^{アシ}而^{アシ}也^{アシ}一^{アシ}所^{アシ}虛^{アシ}也^{アシ}あり^{アシ}ウ^{アシ}也^{アシ}又^{アシ}

延喜神名式愛智郡十七座内孫若御子神社は
名神大社なり^{アシ}豊岡社^ハ天孫瓊杵尊^ト也^{アシ}
又八稚武產王^ニレ或^ハ譽^{アシ}田天皇^{ナリ}ト^{アシ}子享^{アシ}
也^{アシ}多^{アシ}少^{アシ}祠^{アシ}也^{アシ}又^{アシ}ト^{アシ}也^{アシ}

を拜廟もなく多居も又之付くに足らず西門内
内遙原の祠少く主乎社ハ既古祀の差支少ヤ
あり少々一

義至今ハ八幡と神を奉爾天皇と彦翁の御
神と少と古後少々似あらば行す

左塚少々一走より二走にて小以氏、元
書の内竹因より傳承て開帳と神

○一日入書肆見一帖子名靈會曰鑑俗所謂過去
帳也其終書數行字曰吳會日鑑出矣或訝夫子
歷代異子世紀通曰神后エロカ皇后只居モリ模政不即正
位而稱十五世者不得允當故以應神直承仲哀

又齊明称德乃以孝謙皇極重立之号不列世數退後
堀川立九條院外光嚴等五主內南朝三皇神器北

迁而後嗣正統於後小松是皆統兄由日本通紀而記
焉隨通紀行則見義事洋然義蹟詳識云

也信景祐に皇統若此して实又允當といひ
が今既存之我主史文源と云も偶記诵の君に
其事とよし亦略く苟焉として心成因す故
西園の統と年を争はず義蹟、清廉臣之
同袍、其と年を争ふ者多あり

○山城國愛宕郡賀茂別雷神社大神是上加茂社也

祭神別雷命

同郡賀茂御祖神社二座並名神是下加茂社也

健津之身命

伊賀古屋姫命

同郡鴨川合坐小社宅神社名神是糺社也

玉依姫命

世人號りて玉磐翁と達角又命とソヒト磐翁の大
社主祀とよま磐翁皇太神ハ神廟の居宇もびろ
け小して清りり山城風云記并磐翁縁紀の
名ハ松尾小あら大山中余行すれど一ゆ生、卯
月乃參と松尾に清ル和音ノモリ

順徳院御製

文治ノ年松尾山也あつてまかづにちかく空き遊
因支が託よ松尾の神と圓鳴漏神と云り風雲記所
詔丹波燒矢弓の合を有すとヒ又別雷代ワケヅナ
訓一磐翁山の別名とヒ但ワケヅナ山ハ毛布神山
矣キ号歌り

貴布神社一座今社傳為三座曰高靈曰別雷神

跡奥御前也三十二社註為鯨玉命与高靈二座

又ト磐翁と名ニ貴余玉信源とエ磐翁と瓊杵尊
とモニ說往昔の傳事に處の仰るよや只風雲記の說
のとく玉浦神とソヒテ害レクシカムラク草原ト定
記ハ後世の傳りやあゆつかぬ

新日吉社の磐翁達角余ハ古利木立泡那八咫鳥

神社は西よりあらきりと御子玉依日乃命と其威徳
至矣故遠社なり。又玉依命、別雷ウカ命、
なり雷乃命と以て高神カモなり。よきとどくも
車にて侍。風ワケイカツチ吹小阪カモ社又之名可哉。引雷ウカ命を
以て別角身命の意なり。

桓武天皇延暦三年甲子十一月紀船守と遣一ト工
社に從二位と抜けまゝせられ。是を去るよか代
近す。に信て之後代に隆封タケシマ。乃の牛ウシと帝紀
又ミノ供アヒ。其後山地ヤマチ。一のみよして皇都。
跡跡タタキ。其後山地ヤマチ。年間ツカニ。御朝ミサハ。の奉祀も常廟
に守。一ノ望タマ。有智子内親王タチヒコ。跡タマ。而土門院の
御子内親王タチヒコ。三十一。元祐七年四月廿日與
近衛使の式門車タマ。かずも古レリに立つ。侍。と目
おだり車タマ。柳タマ。鈴タマ。金タマ。乃の附タマ。而今
葵タマ。桂タマ。と並タマ。竹タマ。小緑タマ。す。續集タマ。葵タマ。集タマ。宗
雅タマ。の。御子内親王タチヒコ。と焉。の。と。御子内親王タチヒコ。と。う。て。ミ。リ。
表タマ。と。御子内親王タチヒコ。と。御子内親王タチヒコ。と。御子内親王タチヒコ。
せ。あ。ハ。た。二。葉。つ。出。て。秋。そ。も。お。づ。の。木。と。松。よ。と。う。繁。
く。う。よ。し。ふ。支。お。集。御。先。の。お。
お。の。う。き。ね。わ。つけ。の。山。お。ち。葉。繁。お。れ。か。う。よ。う。繁。
又。タマ。一。ノ。望。タマ。

神を守る事あらまの内事也。まもせりけて我やだのま
實ハ細辛にて作る事多莫のれひハ多くも本
州得月よミ行多めれセ細辛と多莫の類とは云ふ事
細かい小て多の事と一叶一少少福ある人ハ多の日
參うとけ多角新拾起後東極院より神よ神ハゆり
多めあひ多の事にうづく事が多々か脅害
而崩帝此後多の日船内のみ帳よりれる事成
御覧してよ歎とたまふと也

○智利朝然岳ハ淳和天皇天長二年二月廿九日詔
登山リ來開拓の法を仰リ虛空庵の像と附して安
きられども

明皇水 住佛谷といふ所あり

笑蒼道人所製人天樂傳奇製曲技語。曰曲之難
有三計律一也合調二也字句天然三也嘗為之語
曰斗仄更須分上去兩平還要辨陰陽詩午詞曾
有是乎又曰亦有三易云者可用襯語一也一折之
中韻可重押二世方言俚語皆驅使三也是三者皆
詩文所無而曲所有也然亦顧其用之何如未可草
之即如實自何嘗可易須須理成章方可動聽豈皆
市中游談乎

第一折闘

西江月未上頭上青々何物眼前楚々誰人山川如

夢草如座花鳥偏能恨

第二折仙呂左候韻

此黠絳唇小外扮小兒紅衣三髻神花雜扮日月凡塵隨上小外大笑介万古千秋鳥鬼

兔走乾生受塵却無休笑破黠羸口盤坐案上大

笑三聲介

信景曰笑蒼乎夏為堂人天樂傳奇有上下二卷曲

十六折祭赤仲夏入書肆見之因少抄焉

○伊夜比古神者越後一宮也乃云天香山命神產五百石

古歌

やをれあらよしもとれうづく日す少翁とく

はまは万葉集鏡中に首の字に

今士庶之間書天照太神守護八幡宮守護等之號
多矣嗚呼二所我宗廟以此号揭旱賤之戶無忌憚甚
也延喜神名式諱天照字錄太神宮御府之書猶然
况士庶謾讀神号半浮屠一習合祀官再效充共賣
神為業愚俗不學而不辨之可痛哉

右八迄前権雨窓書一冊乃門子抄

○霜月

東漢魯相諱勅造孔廟祀墨蹟曰惟永壽二年青龍在庚
灘霜月之靈皇極之日河南韓君追惟大古云

是十一月十日

○白氏偶吟匹如身後有何事應向人間無所求正讀作
譬和訓正加身をもすと讀も亦ゆどありと申た
てゆどとも事古道よあくやうへ

ト野原に毒氣を解教せし者多矣。而して
と少は山乃頃石に得と云ふ石と刻む爲め
ニ云と彼傍教多々と被り。半ば山
○田名多成懐モ偶ノミテ少しだと少す。寛弘
○山田と云ふのオモウタリ。秋にてぬれ、冬にては
と云々。されハ玄賓以前と云ふ。さきよりは後
のうにて名跡くあり。あへん。

○明世宗封我肥後州阿蘓山曰壽安鎮國之山夫我富士山以下各國名山多矣。獨封阿蘓者何乎。

○梅林日本記十有以阿蘓為我國中岳之說。故義端特請之。然乎。

○菅家新撰百葉をそくに玄別の記を。字との多く今略して書も申ゆ。既に

○水上 ミツモ 別様 ウタキ 酔 タムケ 早 オク 陬 タシカ 初夜 ヨヒ
不輸 サヌ 蜈蟬 ウツセ 倭避 ヨレ 況 オグ 服 キル 日夕 ヒグラン
城 シヤク 花折 サナギ 燐 フキ 化 ヲ 涌瀬 ツセ 遊絲 カラ
假寐 カリ 聯貫 ツク 美 ヲ 諂 サヤカ 神女 ラトメ 濱道 箕 ハシ

夕三里 ヴグヨ 不覺 スギガテ

○日本僧家菩薩号七人

○菅原寺行基菩薩

太谷寺光照菩薩 法然

招提寺大悲菩薩 覚盛

西大寺興聖菩薩 處尊

光泉寺忍性菩薩

大經寺大乘菩薩 因澄

立政寺興正菩薩 知通

世外久遠の日蓮と菩薩と稱を但以詳初撰附

○密山嚴尊者 真言
與教大師

天海尊者 天台
慈眼大師

○淨土宗國師号四人禪師号一人

通明國師 法然

善惠國師 證空

佛立惠照國師 黑谷
等照

普光觀智國師 增上
源菴

記主禪師 鎌倉光明良忠

諸書作記故名焉

○卷一 卷首也 六書正譜為平聲

十寔執功 ナシテ
二十也 未 サツ
卷合功 树 シラ
四十也

○元十八年小糸の臣相面尾澤もと満もとよたる而
後て入ましからん氏政より貢仍て屋澤も満もとよ

少業氏も豊臣朝に隠れ家を入る、忠孝院丸た
馬助もと高も和也も其父を説てハル死又文乃
諱遂成吉村より死又文深もとよたる時より死至應
一誠院時小可死後より直小從の敵小路ア壁
勢にて氏政より死と死と死と死と死と死と死と死
リ遂もと保とと恨むり迎せば漏あつ事なし
彦乃李確りゆくは近り且と議せも但左馬
助年を少一ノ月をも歎くにわざのまづやう
先天正十一年葉國脇家毛と毛と助と君の
危どもて、ちがひを乞ひくまに詔す。副小もとふ
主見く爲め事にて因く死ちるをと清志仰謝

と曰老母を小立若迎て是と書ひ可なり国家
夫人義とぬも神氣と極く、主事素志小吏之是
而孝ならざりあり、義を行ふにて因死之
ハと昂志に難の因く自尽せり。近代の兵士
もと者多く之を忠孝全して恨むるより、此
毛叟は其の志、彼大槻名成將の利と慕ひ、子
孫の業を嗣げて戰死する者とす。又日本と
年代同じて語り。

○度々延徳神を幼時小名を求めたり。河を半川
あちのアリタニタニに乃の御傳にて、筆をかまひ
がれぬあり。而となく思ひす。昂筆を定す是を
放ちはく。終り一生就る筆走のどもの
才をせきり。祕傳間差に自信あり。延徳
證子養尊記とちえ一級からにやたぬとも生顔
乃固ニありと云てにんれ多き事あり。よし
や足より力無と改め一生せきり。ハキモ筆人第
延徳が筆走と仰りて、テトトに名成あれ
き。と仰る爲めに、老よあり。彦也
アリ。彦の彦賢と仰ぐ。又ねと入て能をす。城ヲ
トシノミと云古テアリ。年う予善 太神官

年中御幸跡山仰望利の神吉志像。傳よお更に

少ちを入年の寅と号しおか送る事あり是囃
多め也すれど今年の年穀豐饒と頑くも祝
年の寅として三月おととそれを世に祝ふ物を祝
一うそそと云ふ也

○海部の中古に三馬トアリて長月あり此行馬
乃ぞれは三國にあらず古より無事古事記
馬と見しに慶長元和乃比からむ一其尾は下
吉原也とあり前園白秀次忠先考二位法京
へりにこそ三馬の名ハ薄りし可もれず
愚ふ人もちれ世に拘る若き傍出ありて必ず
寺に古代志怪ある所中南れるに富士の経
うちもそぞ年代也寺中典故あるとぞ寺傳
ウリ傳もあと傳もまきつけて不仕りて正暦元
年八月廿八日の事也傳も近代志貴介旅
也乃庵也さかやくあれど當時代とちひ傳
一傳後の時も傳もあらず若明暦の四保を手
あやあらすよやとて也傳

○登木乃秋山別荘名御神樂村ト御神事と村ノ歌
歌竹工引も傳を有り有日傳えそと云々我
廢れ更にほがて云々れど九月廿二日更人としご
御注古よりおいや管がどうゆるといふも神樂の
とや極ありていつれも付どうあれらあくと辛され

ノ事同俗傳來 そ神文ニ月御田の神事乃歎有
リとて師職の老逸せをも玉とおるより社の
寺ノ村ノ村又はてもくハキの終末此神は納
モとそ楊が浦と神君にて多幸也又伊
勢の神ノ宗祠より是を主とする御事に通世
神人達利志乃に浦の形ノ子もあをもく此村民
は祭も其民も忌てして何の事ノもなづかくそれ、
罔生度半引トと有く神の多く山家と山役法
社の不為也ハ役の主教あると廣く真よ役の内に
と神ノ事も多し。ありあれハ浦と神ノ事も多
故里而下夫操官神田鋤鍬柄者毎年二月先奉
山口及木本然後柱之と延森大神文武あり。新例
集二月一日内宮口鋤山神事御田種蒔耕作也上、支ノ日
外宮鉢山伊賀利神事とて鉢山も因文保永懐
訴詔湯鑿山の事ニ山口木本此神を多とつて歎
を多きもの。今世ノ理とばれ塗祀多。一秋海部
の浦鴻六月ナホ青葦刈あて川よ流半アリ。あれ
六月後ノ具の聲とて流離。せ作。半とす。わゆ
城川下流民之モ。えとけり。流舍を化り。義
主。彦ノ年頭天王ナホとて祠を立。ヒセ波歎
形もえ。東神田と耕。初。歎乃。是成御。八段
豊燒。ナホと。初穂と。先左近氏名に伝。一田

圓登場のゆきあひを因相の色おけりと太鼓と鑼
笛とぬうあんと一或ハ戲遊也は遊具成もんとあり
素あらぬ形一色あわせに手とほけ又と經再あくと
経ひき神乃とく持あくそれよりおぼてて
諸神の名すれど東日本費をひきすすみにさうする
よやかにとくすりまく民謡記さりすす年是
小いも渴しそ候りかと差す

○良忠上人、庵利富田院人、嘗て融通念佛をもとも、
ウヤノルが唱へて、寺内前で念佛とゆ。融通念佛
とは、廻我所唱融會衆人衆人唱又通す。我云々今十
念と授文をもと融通念佛は、源す以深淨
ち宗乃唱すもとと良忠初め一不成丈である
鉢と聲わきは室之以深すり今融通念佛是先
幸の佛像我前りて身ノ移々勤めそる融通念佛
是もつけたるにして十念授文せり

○念佛に利するかの本松尾の社廟口なり。而して
是を移れ半て西ハ是樂義にしてまたとく安
寧す。廟口を形よけの信宿の三信處又もと
多ひもあそ今れめよ。取もじにはむりあり
誇て心ととく作そ方つまたとくてモセ失ふ
事の多くる

○東御少爺開基ハ朝日寺號珍法師也

○清和天皇貞觀八年七月深殿大后疾僧相應禱而有應因最澄円仁賜大師号是我國大師号始也。薑と撒せまひを徑荷食懸にあり。如其不食せば、而て盤薑にそのまゝ残り至於半升と淺見氏アリ。誠よ文義以テアリてあり。仰トアリ。仰リシに名多岐ウ云世の古書に記なくハ今後國々ノと亞同ニ書備考。孔安國云齊禁草物薑焉不食故不去夫雖亦可亦不去則常食之有薑可知云。淺見氏博識考。助あつてある事一とアリ。南史乃梁子野傳。傳よ孔稱。石猿とひ百川當海に乃ち王荊公問小列貢。答うて本ミな浮ケリ。かく小孔子曰。と勧。アリ。かくを食す。もとアリ。可笑のむ。

○勢田社重脩

伏見院正應四年 應永廿六年 義持公

長祿二年義政公 永正十四年 義晴公

元龜二年信長公 天正十九年 秀吉公

慶長五年神君 貞享十二年

大宮 八畝 氷上 高坐御子并御舟

日割御子 上知麻麻 大福田 一神前

龍神 清水 左王 御田 内天神

南新宮

元祿五年造替

下知我麻 楠木

同六年

孫若御子 乙子 今宮 東西十二社

氷上末社 麻苧 八剝末社

八十社 同 徹社

高堅末社

鉢取社

同十六年九月

二名新宮

龍田

賀茂

金社

月社

山社 土社 浅間

王若宮

稻荷

山王

天神 以上大官末社

同年

神宮寺

号医王院自此為真言宗

新宮

八剝末社 同 春日 住吉 氷上 常世 南新宮

不動院

本在八剝宮

愛染院

本三重塔也

十月二日供養

此院ハ弘仁九年空海建之也深院の事源ハ平に天皇
御達ニ至る所のやうにて玄文乃此ハ努利世爲主也而下
山休頃ちくを後破壊して像を摩崖に安置す
安土ノ之は後久ノ事

○惟是流神名小泊又とは父に次てあらうといふ和洋之

と何り伯母ハハリキモヤ一笑之

或人ち是考舊に有ニモ既其の時多御神ありや
ニ尊ニニモ御御モウケノミシマの神也トシテ
同ニミタヤルハ七氣の年ハムテノミシマとソレ神あ
アモ呵

○弘法法華開題

礼 仁 忠 治 正 信 玉 元

妙 法 蓮 華 經

世をまといく駒糸の八百乃九千の種あるす
胎教中胎の大日ハ而所治陀羅ノミ家あひの傍肩
さ鑑石集にス(ま)

○列子儀渠之國其親戚死聚紫積而焚之燒則烟上
謂之祭殿

折るに夷狄の大槩りのめも

○造天地經云宝曆并下生世間一月伏羲吉祥并下生
世間曰女媧摩訶迦葉号曰老子儒童并号曰孔子
ト又清淨行經淨光童子往為孔子又遣月明儒童往為顏回
一也云リニテ小可笑漂水縣の南七十五里小儒童寺あり其筆者有

○淨去大士と往古今ニ栗如來とソリ半發迹經出

○流蘿

神佛乃斗怪よ多と結のり(あま名は)う
佐海稱よアラカハ聖靈のサリラク修羅
ツ高年ハ晋代どう後ヨメドヒと善材小

○青燈瓦

神仙傳ニ出
西瓦ノ類也

東瓦

什醉ニ出
冬瓦の半

○洞冥記小懷夢草ハむか漢武李夫人と呂后東

古羽鐘山の香草を砌して傍ノソキモ昂首に之
へまくと又僊の手ひれとも清章の便よきしゆ
○老子云真人遊時各座蓮花之上云是園尹今喜う侍
小也新氏佛像と莫差載行も方士々庵誕りゆ
ひくぢ風

○劉羽を伽藍神ニモ向車素榆漫志小園玄長破天
師り受護法の陳姓僧智観宋侍臣王欽若附會
私言至怪誕と云佛祖通載小い附會のものも
ねく活のたまうの事かの事かは傳あらまう
の傳画龜を模必毛尾となりて是古今活よ二歳の龜
に十尾となり年々一龜の事也又一種
毛龜と云あは是也

○世本云共鼓貨狄作舟黃帝二臣也白晳云古者觀
落葉因以造舟

○元の元貞二年双燕柳湯佐り宅小堂久之家人煙を
举て壁を照すに雄燕竝立して猫小久之見る
雌燕悲鳴して是を飼テ是と争り雞を捕り翟を成
成して後去る所年唯又將來りうちて是久之見る
がり無し只粉瓶のみ事にて因ふに立リ是年六月
見る人感して名づけて身夢と云ふとや又明
成化六年淮水漢人劉考考の文瓶をそんと瓶と捕
烹り瓶立て而傍へて竟に沸湯の中投
て死む漢人劉考考と呼んで之へり

人足を待て列考よりと双極歳次より

免まろ

○乍みうきとつ葉至河内小錦放那石村より代々
はり生せたふす一石のよしア

○日本釀酒の始に杳又の名ハ須^{スコリ}許理と云人應神
帝時代百濟より來りて傳^トリ也古事記小豆アリ
姓氏源^{スル}は兄曾保利弟曾保利二人韓國よりあり
酒を造り初リ酒と云アリ又釋國の鍛冶も世^クアリ
傳^トリ草素と云人云始^シる韓鍛治首^{チヂノオト}と称す姓
續日が記すあり物^シくハ草素^{シス}と度今延徳亨^{アリ}
の或問聲國^{ヤシカ}小豆^{タウ}少祠あり^{アリ}又小丑倫形の石を
之す後楊貴妃の石塔と云^{アリ}古事記述聖の時是成
廢^{アリ}古記すありや曰聲國百尋^{ヒヂ}よげ處^{アリ}小豆^{タウ}墓
アリあり合ハ天神セ代乃^シテ石と云^{アリ}一^ハ坐^ス
圓冰川上^{シテ}素盞烏尊軒^{アリ}ち地乃^シ小舍利^ミと埋^マ
沙^シ墓^{アリ}沙^シ墓^{アリ}は墓に生て多の玉^{アリ}と云^{アリ}
也同^{ホド}アリ^{アリ}高^{タカ}の志^{アリ}と云^{アリ}而^シて楊貴妃と云^{アリ}を後
人の所^シキと云^{アリ}

○癸未の秋神文寺佛閣重修あり延久元年既起室
海以為大焉^{アリ}其深^{アリ}八鋪^{ハチブ}八鋪^{ハチブ}而^シて其^シ間^{アリ}高^{タカ}
清^{アリ}と一^ハあ^リて其深^{アリ}の小像及^シのすまの像^{アリ}
あ^リを是^{アリ}を主^シのや代^シて其^シ八鋪社内^{アリ}一定^シを勧^{メテ}

ミタモ日暮又八劍の御代より配りあり、往昔空海護
主と仰せられたり地人とそ今度も初浅小像也あらずと至
空海の像と空海涅槃也たり古より頃ニ失つ小僧
リキ座院大像也空海坐像也と神高寺のは三宝塔の
御坐像也。因記の最澄以為此神東方を七佛因辟
と故よ神多吉付荼摩陀と名す。とて五名宗の傳又以為大
事を傳ニ世八劍ハ御坐あり。凡佛ハ祐社乃形也。又
年絶くとて一定なり。す。空色の勝見はうきらふ
ぢれべから

○同記大宮五所次第曰一素盞烏尊二櫛稻田媛三日本
武尊四宮酢媛五稻種公

謹梅小社傳第一天照太神或姫神第二素盞烏尊と云
云々延久記載又別經の傳と云々と云神乃
配位ハ小経の事れあくに夫照神と云と多くハ天照
太神と思へ。社多一地えどりて一社にあくを神託と
多し。小放至て可矣。

○神名式大上姉子神社と云ふホノカミアユゴト大訓
ナシ。如今社家ニカミトシ。ハ就れる。云々予云
馬糸利訓か。て詔。ナシ。藤原村楊柳の
詔。小日女武子。甲斐。河内。室に坐して。宮砂修成
立。ナシ。阿由。知。何。多。比。加。弥。阿。祢。古。と云
足成つて。それハひい。あひ。と。も。の。吉野と。也。

○正應六年六月十六日託宣記龜田正一位大神宮
とあり

○仁明帝大政官符龜田祐休五体圖造立
仲の像々々々々彦并東光寺付ねは古きむ
の繪あり龜田乃西体仲と云ふ多勢の外文珠
地藏馬頭毘沙門の像あり是ハ源を又石破八劍
ち念れか代佛と云ひて有八鬼殿司の筆ありとそ
あれ仁明帝時代の事也

○甲子より日蓮宗と淨空宗の法縫ハ天文二十二年
十二月二日原義濃守虎種法縫と有字にて日蓮
宗へ不詳によくて刑と云ふと馬橋民放因爲傳
承般高天主清心と合せ小因爲と云ふ

右は高麗國神の因縁抄也

○董仲舒曰天者群物之祖也

對質
良策

○伏按我國史以天御中主神為万物之祖者尤有味也

○府謂室藏貨賄之處庫謂車馬兵甲之處左傳疏

○兼名庫而以之名之者二月為之而有之言及
八事也李氏曰至元正月開之多矣故云正月
言兼而之を申にてもう一ヶ月と秋為之也
乃うるさく似づくに詔書に詔すとも秋のをども
にか

○慈照新宿勅
九月神嘗を祀よのをすと度す

次乃承小唐児とて初里にて錦繡の衣冠着を継ぎ
に山毛丸尾を以て載そと次ハ神人多くのうて
鴻毛了ニ手一門私情成漕也トリ丹生山に神靈を
守リ土牛上るに海底鳥事ありシモカ唐児は
かしめりと

○明人陳元賓謁拜敬公寢陵寛文二年
壬寅冬也 寄跡東溟敷
十春感公升斗洁窮鱗スコラ幾年幽廟瞻無自今ノ日
玄宮拜有因驥困鹽車憐伯樂龍埋神劍辨豐城
自顏一滴醉知淚銘德千秋永不磷自注云城音
申古韻通用唐李適詩化工渺黑洛陽春柳如絲
飛花散滿城

○嘸原去一てまほ勝月但利君叙爵のけうらひ
重きせり小帶便よ 疎履よまつりけり古松峯に
老の曉又そつゝ小峰れ重ね水と解新草和
此を以ふと清々ふやして湖よほの並木
迦尾張之神社祇くまた极尾尾山うしゆや
林先公西行しきそむられハ丁度室に墨棟とねを免
たまつる予遺余あゝ一昔成勢既終よ豈今り哉
当國乃玉遠に至ゆる天武乃御下小孟幼達鉏
鉤と乎うりゆづり代々顯任の事ゆりのせん
一又少北主の相政事教と尾治傳に封一清
慎ムと謚ありシ後小 故云以て封謚と称す

○昔我が國任太政大臣而執事之臣多有封謚

史

文忠公
清海

良房

忠仁公
美濃

基經

昭前
前

忠平

信濃
貞信公

實頼

清慎公
尾張

伊尹

三河
謙徳公

兼通

遠江
忠義公

頼忠

駿河
廉義公

為光

相模
恒徳公

公季

甲斐
仁義公

以外謚号成る所名所於多く中世より沿て唐子ノ諡封の事やも寺院乃号と稱するハ東三條権守義重院改めり法皇院と号す

○后宮門院等ハ後一條院の母后彰^{アキラ}又と上東門院と号き下より御子御女あれより先皇后證子后證子為師の後東三條院と号す一寺あり

○神皇正統記云上古之勲功あれハ主て官位凡進むと

あやうら常の左位者とて勲位と小品を、至一等より十二等よりあり、位の人りれども勲功高く一等にあれ、正三位乃下位三位の上に列す。一トアス又アス位ある人是を以て並ずるあり、一人と云ふ

○唐極^{アシカ}に宦位令第一乃義解小臣も^{アシカ}うなり夫宦群位ハ帝及皇樞機天王乃權衛也りを主人成選ひ板^{アシカ}も^{アシカ}天半^{アシカ}に委せにして、宦位^{アシカ}も^{アシカ}職務成かつ人を遣ふと以て只は君の私よまられ候候の事小前仰アシカ小右より選舉^{アシカ}ノ源のやうりともすな、勲位ハ度の割よりひうり我終^{アシカ}者位のみうりかハ^{アシカ}くかくし、源倉將軍遂^{アシカ}時^{アシカ}リ^{アシカ}京

にやうじやうとく者とく友位ともみへとう
書に文の書はるはるあらゆくをくの取扱い乃
武士のまことの間もく堂上乃家に移をひき口宣
成やうてよゆうとくのうつ落はゆくうつくす
もそハロ宣もそく自家のち家のそ浦うらとあり
書の名のうけくく神君一統の後を御りまし
どくまをゆつとちくまをゆすりうすと來る
何を傳ふと官名と行世の傳とありやうと半そく
とえれあゆけあるるあくは是源ばんのう小あ
そ伝ふあるくはまにあくへうく人や

○官府宣ハ持致もたらす文書廳宣ハ引とく文書
遠便別あらそての文書なり勅文ハ諸處事務之
以奏すが文殿いんかハ諸臣吏もするあるけ子所
あら書なり

○上階ハ近階加級持位の事

○唐太宗文武皇帝貞觀元年春正月宴群臣上

群臣宴奏さう秦王破陳樂ラム 緋目

謹按るに破陳樂ラムは宋季王たり附劉武固破
秦シナ一軍中は曲と仰りそそを年百二十八人
小定コウジンを立スルの年ありりリ後あリたれり神功破
陳樂と名づく貞觀七年又更アゲて七德の舞
と名づく是左侍小所詔マサニシタシタシ武有士德と云焉

是成多終は傳てく代へ參す。一朝聞の皇帝被陳樂是々大曲忠よき傳絶す。少々今道詞の歌乎被陳乎一人乃舞乎アリ。我瀛洲胡廷の樂友小諸。ち伶人をして起舞とむ。かく云薨死して後歌乎被陳乎。謡乎。又。おの音し今玉にほふらけがみとぢ。傳乎。豈云興絶乃志も。而く禮樂の際没。又。土也。うき。き。原乎。ゆく。せや。す。せを。す。え。争つとも。り。ひ。す。す。じ。も。り。

○名の如九病と書む力伎妙。年少者と頼人。年老者。一時圓羅丸九病とて差仰う。す。後。此識者。トは書ハル。あ。に。胡廷。演。舞。奏。委。於。日。舊。云。王。成。病。す。小。主。そ。た。太。左。后。く。太。左。后。地。序。二。度。立。て。一。度。病。す。も。是。令。す。力。伎。演。手。放。九。病。わ。れ。と。不。極。そ。重。す。半。人。と。そ。五。分。終。り。ま。る。我。多。多。疾。浮。ハ。知。れ。往。凡。と。半。付。ぬ。す。と。り。酒。く。一。く。云。て。主。に。宣。告。す。と。て。達。ク。既。つ。ま。ー。也。に。拘。ふ。

○陽病則陰勝故馬疾則卧。陰病則陽勝故牛疾則立。造化權輿ユ生ナリ。保佑馬ハ主モトガリ。牛ハ祐。不。ツ。ト。ソ。ハ。主。ア。リ。

○金翅鳥出符子正法念經株^{テラ}文為說乎

○石燕 湘中記云形似蚌小更名也

○三足鳥 瑞應圖云王者慈孝天地則至云々

○正鵠の正ハ鵠鳥の事 佐助ノ潛確類書一百六

○龜壽万年 出述異記

○三月三日ハ湖干此時こそ極引佐吉此澤をより之
よりとその日海をよ遊ぶハ己の日被鬼造風名度
の書ハ游手れ事なりとソノ人あれと潛確類書百
十六 小三月三日湖盡トハ裏邦にむかひす

○鴨螺螺 出南州異物志

○人面獸心 出阮籍獮賦

○伊勢西宮造望乃材來迎世ハ紀経より松木とす
竹ノ元祖底松入るより始りテ木材とす
て今度ハ佐治木取若山とす木材とすり竹子とす
やけれども

○書院玄閣のりまテ鍾乳立きたりテ室内を方丈の時
五つの絶院多代玄室と立ツ時若以テ柳葉にうて
化されしより今ちくわあらかまとなり。書院と云ふ佛考院
考院又稱え觀音堂と云ふ。舍利子塔也。中央丸
阜に香花と云ふ種種の花と掛

○今祥刹年代以小密嚴の一间と掛ハ觀音の像と掛
中央の阜に香花と傳。家の清年と清と云ふと正
一山の私迦ハ兩邊あるやうにうと併めも無事

○ 槐坂 東澣より多く手書源氏やうりあらき卷小あれハ久
きもとふぢり

○ 神代巻踏堅上庭かねとねと坐すわも源氏三あをれをまつりを
そしゆとあはせりとソラトムと以て拂ほくれしやがまやがま
とぬみて刻くよへるや壁邊かたへとゆきはと刻くよへる
庭にわにまはりゆきや若達わかだつを以うて鑿うくうとあれハかまかま
もほもまよひのよみけちりりよみよみをあり成なる
うそせ

○ 諾うけいけつと刻くす、文底ふんていより相あめの心

○ 我玉わく下し入いりまま入いりまま之時そのとき文章院堂監名簿ぶんじんいんどうげんめいふ書か其その字じ

○ 先公薨おと後近臣奉謚号ほう於其家その或ある可べ奉う祀し乎う予よ曰

謚号えいご無君奉臣家むぎょく之禮しき昔漢ききはん元帝げんたい時ご玄成等げんせいとう奏ささ曰春秋しゅしゅう之義父のじ不祭ふさい於支庶ししやく之宅の君きみ不祭ふさい於臣僕しんぱく之家の此こ知し焉や君主きみしゆ不可奉う於臣僕しんぱく之家の今浮屠氏漫奉まん高貴こうき之
主しゆ為佛事ぶつじ者もの是これ貪檀施うんたん也や嗚呼君きみ在い臨りん於臣しん之宅の則そ數日いく以前洒掃しゃく内外内外而と謚恭せう充嚴じゆ焉や今君薨おと後奉う其その主しゆ
者もの似忠厚ちゆう而と其實じつ戾れ禮瀆れ神じん耳况う祀し之無敬戒致誠置おき君きみ
位お於我常居じょう之側そば而と每まい牒てつ近ちか之不思甚し也よ吾子ご思おも之の
○ 我國傳族道くわい一經いつの至いた徳とくありとくとと之の士し乃の如く
ノのて浮圖ふと小こて家いえとと役わく優ゆ際き寒さむとと終お徑きと
之の今いま不可小こ也よ而と夙ゆ有う高たか仰あ之の而と中興ちゆう之の祀し
初はじ而と之の度ど長なが八年八年よりより休やす別べつよ

なりと我れを寛文八年冬徳の事ありや山の賀
もと無罪三山検挙と号し初評の号り良瑜修む
代に詰り三山に補され一時

○身は御子と申すと云ふ也御の事と申すと
内は無野の事の時はと多きと一役行たる
聖ぐら金多の匂又金筆下り無罪出筆せし年
數十度ありりと板を輪成多筆と云ふと申す
身は廻り書筆と云ふと申すの入筆と云うやう方より
筆は如筆と云ふと申す聖室寛筆セシム筆中蛇と
教す故筆と云ふと申す筆には至室毒蛇と云
サヘト車廻院その筆をうしなう

○唐太宗不欲赦范氏謂善政 唐鑑

良民八君乃澤を被すして眾人乃く有く有く八臣を
亦佛者也云うびれらう穀萬とぞうとぞ古穀を
害するにとましとぞく侍

○屠兎江多と鹿牛馬の肉と屠て無たあからばと云に
福多と書とアモ所食と云つて江たゞりことと
刻モ順和名抄に取鷹鶴飼也とはたばねどりの水清
きとトナト追と
キリとぞくへ

○寄居ふかくとも和名抄よかみかとひアリみか蟹
蟻アリ蟲のうち蟹小似て殻ハ蟻のくもゆゑ（ちりゆゑ）
カハ移後乃ミ捕らんとひまハ散可代の空殻とひりて寄

唐の文小あり而海をもてて
引船せ共水とておれて船ぬく所ハ前とぬりてそる
ニテ舟船入半なり古人あと不半洋あるま
車多一轍を輪にして對すとソラモはくす紫螺の
扁ひるね少て蓋ぢと云ハ可あり又相思子と海槎餘隊
あらに螺の工ぐれて中更一石に起すとソラモは洋
相思子の酷とめて盤旋もとハ小羸の蓋なり崔禹錫
ケ食經小白玉燒蓋とソラモは小羸の蓋なり崔禹錫
ウカカシモトモの國の人見てハ中更と云見之とも
ソラモはあにソラモはかく争はうもあがみ
ソラモはうますます

○新撰万葉文信要とあるがあるべれ半

○正月七日朝家青馬節會共以ハ公車相原アリ主傳
月令等の倉詔とソラモまちのる人臣同妻約とソ
祝辭モク成ましむれ事より起るとソラモアリ極きれ
妻約の辞父蚕事と祝事キタリル蚕と馬と云ふを
同くする半圓れの注する馬化して蚕と云フ
故半も行はれハ古川ニナシシソ我尾ぬ海ぬ
又古川の名も併しぬれハ尾波八丈と織アリ半也海
ハヒト海放歌アリハ丈織アリ半海ヘタリ申比テ
ナリ高歌メ移リタリ也

固云万葉ハ遠逸の祝辭を追ハ因半既祝の夫約を蚕

事既とぬきり人衣食住乃ニ減まるとす故に
年既初是とてぬきて日と復して往くを食とぬ
食と保ちて以て主と附る家に居て而猶よあられ
そ是人の生とまふ道之王政も人を治めても孝弟
忠信を教へぬに舍に八珍方丈坐とあけをみて胞
をすく錦繡を西とておもく今殿玉樓より居あーと
さうに篤修のゆうありて主教と教人ともうれ
り昌改り阿房の中來、民の恨みつゝ墮まつ連樓已え
つゆうひて未思世既矣とありて竹林人是方とあく
し竹林と見能誇僭貪欲にてぞやくのみを誰と
望むほし人ハ秦皇隋主燒堂なり中後指不_ト意念と
猶もとろはれとせりゆくゆく人ありと文

○今朝廷舊年二月あり臣聞わく廐のり舊とひ
て年の始元舊と年一も

○易曰道籥乾鑿一度讀易曰三折三滅論語識韋編三絕銀
榴三折漆畫三滅素王

之功曰素功梅福讀書眼曰月眼山公言曰諱言高后
盡言

曰索言許后違道之辨曰詭辨石頭傳失言曰墜言漢書和韻
之言曰諧語東方朔喜飛揚誹謗之語曰飛語灌夫傳一言
必信曰忌然諾被謗曰橫被口語楊惲傳

此故車云要玄集にト行らむニ志をす

○神武紀向日字釋日本記十七私訓トヒニカシニムカフト訓せり

極に日向ハ松訥東向ヒカシムカヒノ轉ヒウガニ

○梨子をかく後傳傳あるす本系とかりて訓
さく

○今民家行車につきたる樋俗語にまこと云ふを
何のよそ同輪鼓のよそ)が鉦相撲の記より
細腰鼓のやまとふ樋よ付る布乃とのかどり似て故
はるありハ樋或き行鐘とかり)

○筆丸十三法小十の外トイキントノ斗為中とモ
○筆漢よたゞハギ鉦相撲新羅琴十二絃ノ至法
の名甲乙丙丁戊己庚辛壬癸天地とあり五絃ハ筆
丸斗力中のモ

○百寮訓要抄ハ後禍光院閑白主墓信康苑院前太政
大臣之請所述也

○ト教象唯一と称せん半とと法典唯有一巻の文アリ
されりと名法要集に後一條院震筆に之唯一乃
ニ宗代書のふとソテ御元祐道春役書と物て兼
延々化小あゝと云フリ掲ぐるに考證記又高道惟
一乃詔アリト氏これと高小アリ

○兼延々神宝圖一巻行法の象とのそ是考合象の
考り

○頭宗紀室壽日筑立柱者此家長御心之鎮也云
○初穂延喜

式
祈年祭祝詞

孝德紀盟言曰今共瀝心血今人莫とて記誣與列の

まとて非なり是ハ志心乃詔放よ血と誠と訓たり重體
小鷦^{シラサギ}達血列のとづく故も流血を以延年乃失とす今
北血を花坪小鷦^{シラサギ}モモジタルトヨウ史記陳餘傳^{シテ}張良
鬻其指出血探索隱是喪至誠為約誓也と云れ小鷦^{シラサギ}
但佛書以血為墨之云々

○尾張一宮相殿有大龍姫^{オホタツキ}龍二神^{タツ}極^{シラフ}ニ三元五大傳神
妙經^{習合家}新作汝大彦龍王者伊弉諾尊變作也汝大姫龍
王者伊弉冉尊變作也云是佛書龍王乃高麗小送^{シル}家
神^{シム}小混^{ミク}モ高哉

○蛭兒舊事紀云水蛭兒日本紀有水字

極^{シラフ}ニモニ^{シテ}小^シに^{シテ}小^シの^{シテ}こと^{シテ}蛭の

蛭^{シカ}を蛻^{ヒラフ}て蝶^{ヒメノタチ}化^{ハシメル}トモト云^シ蛭の字ハ

○大虫^{アシカ}今因^{シテ}小妙^{ミヤウ}をモリ^{シテ}蟲^{ヒラフ}成^{ハシメル}トモト
内^{シテ}モ^{シテ}蟲^{ヒラフ}の^{シテ}川^{シテ}流^シモ^{シテ}蛭兒^{シラカバ}成^{ハシメル}トモト
に^{シテ}の^{シテ}西^{シテ}セ^{シテ}流^シモ^{シテ}と^{シテ}往^カ死^{シテ}後^{シテ}に^{シテ}そ
子^{シテ}考^{シテ}小^シ入^タ多^シ事^{シテ}と^{シテ}モ^{シテ}す^{シテ}御代^{ヒメノタチ}卷^{ヒル}
軒^{シテ}上^{シテ}古^{シテ}此^{シテ}居^{シテ}多^シアリ今^{シテ}か^{シテ}死^{シテ}望^{シテ}既^{シテ}
と^{シテ}あ^{シテ}ハ^{シテ}作^{シテ}の^{シテ}本^{シテ}は^{シテ}あ^{シテ}レ

○西月^{シマツ}ノ^{シテ}死^{シテ}肉^{シテ}也^{シテ}是^{シテ}ハ^{シテ}何^{シテ}用^{シテ}也^{シテ}と^{シテ}あ^{シテ}アリ
被^{シテ}シ^{シテ}三^{シテ}角^{シテ}柏^{シテ}小^シ酒^{シテ}シ^{シテ}ト^{シテ}も^{シテ}大^{シテ}掌^{シテ}金^{シテ}も^{シテ}附^{シテ}
不^{シテ}あり又解^{シテ}シ^{シテ}ノ^{シテ}も^{シテ}ぬ^{シテ}や松^{シテ}高^{シテ}低^{シテ}小^{シテ}十二月^{シテ}幽^{シテ}
な^{シテ}人^{シテ}の^{シテ}食^{シテ}物^{シテ}レ^{シテ}ト^{シテ}又^{シテ}主^{シテ}死^{シテ}復^{シテ}入^{シテ}も^{シテ}争^{シテ}る^{シテ}也^{シテ}

以大和其實為山外ヤマトトコトニシテ今生駒山外也以神武紀考然矣
但此山者蓋考峯也饒速日尊初辟考峯遂遷鳥見
自庭山ミコトノマツキヤマ喚云虛空見日本速日尊所名也言滿天山前
也万葉天
余滿傳是土地廣平意也考山前面即今大和地也日本字以
義訓
書之

○神宮雜例集曰太神宮四至東南西深山無有人宅
此限宇治川者其程去宮一里餘此內不住人宅禁
制尤嚴此則為禦穢事也今ハナヒ核の内子良良の故色更
新せまく御事も古刻すもあら
竹たきはくのもと多きを
神河山の富とありふはるか

○大掌會次第ハ貞觀儀式延喜式江次第康富記等に
詳なり其始天武天皇即位五年有卜定齊モリキ尾
朝月令の後ヨリ同イ

張國山田郡次丹波國訥沙郡並食ト云日本記

○五節舞其始不見日本記政事要略二十
年中行事廿七謂之詳ナリ日本
三社託宣 天照太神の託と云々既戸皇子の後
とぞれり聖德太子御記文ミサセ或曰ト部兼墨等
於見林曰宣流記と云々三社の託と云々也主
事主と云々伊豆兼伊豆と外縁ありれど無限は死
と仰れりと云々と云々

今俗疫病流行の附蒜と云うにす竹ハシモウ肉スジ
もつやと同人あり漢書のちに引く又名竹肉タケモウ
或曰此より古事記云日が起る足跡の所ナリ

食事に糧あつまつ付山被荒振袖に蒜を以て湯を呑
めし事と云ひ是山氣の瘴邪と除の爲めと云
り向の傍へ陰度乃よりにてけらんや
道に以上六備忘難暑に至る

○本日は朝晴れ午後は雲が多めの天氣で
風は西北の風の爲めか山間の風が強め
西風の吹き方の爲めか山間の風が強め
西風の吹き方の爲めか山間の風が強め

○本日は朝晴れ午後は雲が多めの天氣で
風は西北の風の爲めか山間の風が強め
西風の吹き方の爲めか山間の風が強め

